

技術・実践

新生児への生後8時間後ブドウ糖投与廃止に向けての取り組み ～母乳育児支援のために～

盛岡赤十字病院 産科病棟

小笠原詩子

キーワード：ブドウ糖投与廃止，新生児低血糖，母乳育児支援

養を推進することを母親に口頭で説明し同意を得た。A病院，病院長・看護部長に承認を得た。

I. はじめに

母乳分泌を促すためには出産早期からの頻回授乳が必要であるが，A病院では生後8時間後に低血糖予防という理由で新生児へのブドウ糖投与がルーチンとされている。ブドウ糖投与後は嘔吐する児が多く，頻回授乳の妨げとなっていた。そこで今回，母乳で育てたいという母親を支援するために，ブドウ糖投与廃止に向けての取り組みを行った。

II. 目的

生後8時間後のブドウ糖投与を廃止し，母乳育児支援につなげる。

III. 方法

1. 研究対象：産科管理の新生児69名
2. 研究期間：2016年10月～11月
3. 研究方法：
 - 1) 生後8時間後のブドウ糖投与を廃止
 - 2) 血糖変動に関する調査
 - 3) スタッフカンファレンス実施

IV. 倫理的配慮

児の栄養管理について，血糖測定しながら母乳栄

V. 結果

1. 生後8時間後のブドウ糖投与廃止

滝¹⁾は「健康な正期産児に，ルーチンで水や糖水，人工乳を補足することは不必要であり，正常な母乳育児の確立と代謝の正常な代償機構を阻害することがある」と述べており，ルーチンに糖水を与える必要がないという根拠が明らかになった。そこで，生後8時間後のブドウ糖投与を廃止し，頻回授乳を実施した。

2. 血糖変動に関する調査

1) 早産児・低出生体重児・母体糖尿病児等の低血糖のリスクがある児もいるため，ブドウ糖投与を廃止した生後8時間後全例に血糖測定を実施。また，母乳分泌がない母親もいるため，低血糖を懸念し生後24時間後直接授乳のみの児に血糖測定を実施した。結果，8時間後33例中1例(3%) (低血糖リスクなし)，24時間後母乳のみの児9例中1例(9%) (リスクあり) に低血糖がみられた。

2) リスクの有無に関わらず低血糖となる児がいたため，8時間後と24時間後で全例血糖変動の調査を実施。8時間後40例中8例(20%) (リスクなし7例リスクあり1例)，24時間後40例中2例(5%) (リスクなし母乳のみ) に低血糖がみられた。24時間以内に1度でもミルク哺乳している児には低血糖はなかった。また，母乳分

泌状況や吸綴状況も観察したが、血糖値には影響していなかった。これらの結果から、医師と協議の上、リスクの有無に関わらず生後8時間後は全例、直接授乳のみの児は24時間後も血糖測定することが決定。また、低血糖の際の補足（ミルクか搾乳を哺乳）、血糖追跡、医師への報告等、統一したケアができるようにフローチャートを作成した。

3. スタッフカンファレンス実施

「嘔吐する児が少なくなった」「頻回授乳しよう」と意識や行動が変わった」「直接授乳の回数が増えた」等前向きな意見が多数聞かれた。しかし、「母乳希望であっても乳頭の手入れが出来ていなかった」「頻回授乳の必要性を知らない母親もいる」との意見もあった。

VI. 考 察

生後8時間後のブドウ糖投与を廃止したことで、嘔吐する児が減り頻回授乳を行うことができ、母親への母乳育児支援へとつなげることができた。リスクがなくても低血糖となる児がみられたことから、低血糖を予防できるよう、出生早期からの更なる頻回授乳、体温管理等が必要であると考え。スタッフの意識は変化したが、母親が頻回授乳の必要性を知らなかったり、乳頭の手入れができていない状況があったため、妊娠中の授乳に関する指導の見直しが課題としてあげられた。

VII. 結 論

1. 生後8時間後のブドウ糖投与を廃止したことで、母乳育児支援につながった。
2. 低血糖予防のため、頻回授乳や体温管理等スタッフへの働きかけが必要である。
3. 妊娠中の母親への授乳に関する指導の見直しが課題である。

（本論文の要旨は平成29年10月20日 岩手県看護研究学会で発表した）

文 献

- 1) 滝元宏：母乳関連低血糖，日本母乳哺育学会雑誌，9（1），p88-95，2015